
永遠

篠義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠

【Zマーク】

Z7151P

【作者名】

篠義

【あらすじ】

関西夫夫

関西弁で、字書きはできるのか？ で、はじまつた、このお話。

意味がわからない言葉があれば、連絡ください。はははは。

そのいち

永遠なんてものはない。

人は変わるし時代も移っていく。

だが、変わらずにいる努力は出来る。

他の余計なものが変わったり流れても、変わらずにあればいいと願うことはできる。

「結婚？ また、無茶なことを言い出したで、このあほは。」

唐突に、出された書類に目を遣つて、浪速は苦笑した。そこにあるのは養子縁組の書類だ。確実な繋がりが欲しいと、同居人は考えたらしい。

「せやけどな、水都。」

「それで養子縁組して、それでも別れることがあつたら、おまえ、どうするつもりや？ こんなご大層なもんやつてからでは遅いんやで？」

からかうよつに言つたら、ものすゞい鬼の形相になつた。だが、まだ笑つていられる。元々、こいつはノンケで、ビニードビツ蹴躓いたのか、俺を抱いた。

・・・だからな、もし、そういう女性が出てきたら、おまえは、そつちとくつついたらええんや・・・

永遠なんてものはない。今の気持ちが変わらないという保証もない。ただ、この時間は大切ではあるけど、それで縛つてはいけない。自分はないだろうが、それでも擦れ違つことがあるかもしねり。だから、確約なんでしたくない。

「本気か？」

「本気や。おまえ、これやつてもうたらホモ確定の上、公表するようなもんやぞ？ そんな怖ろしいことはせんでもええやないか。」

まだ就職したばかりで、右も左もわからないといったのと、なんとかおどろしいことを考える、と、俺は笑った。出会いの機会が増えているのだ。これから、ここにも出逢いがあるはずだ。

「俺は離さへんつ。」

「今はな。・・・せやな、三十年しても一緒におつたら考えたらんでもない。」

よくよく考えたら、俺は生きてるか？　の年数だ。そんなに長く生きているつもりはない。でもまあ、約束するなら、そのぐらい長いほうがええやろとは思った。三十年なんて時間、変わらずにいるのは難しい。静かに、ただ寄り添つていいだけなら、どうにかなるかもしない。けど、現実には働いて食べていくのだから、世間と付き合つていく必要がある。ふたりしかいない、という状況ではないのだから、何が起こるのかなんてわからない。

「俺は、絶対に、おまえを離すつもりはない。もし、ほんまに、おまえが好きやと思う女が出来たとしても、別れるつもりはない。」

「おおきに。」

たぶん、俺は、特別な存在なんてものは作らないだらう、と、自分でもわかる。少し壊れているらしい俺は、他人は他人でしかない。それに感情を向けるというのが苦手だ。どういうわけか、花月だけは、それなりの感情がある。だが、それは、俺のほうの言い分で花月のものではない。

「そんなに深く考えんでもええやろ？　とりあえず同居するけど、成り行きで、また、その時に考えたらええやないか。そうでないなら、俺は別に家を借りるで。」

「おまえ、それつつ。そんなん、絶対にあかんつ。」

卓袱台に置いたタバコを手にしようとしたら、押し倒された。花月は、ただいま盛り上がりしている。だから、この話は、いつまでたつても平行線だ。それなら、勢いで誤魔化しておこへ、と、俺は倒されて、そのまんまいを抜いた。

・・・・そういうや、俺、ここんとこ、女とやつてないな。・・・・・

田の前に迫つてくる顔を眺めつつ、そんなことを考えていた。この関係になつてから、俺は、こいつ以外とやっていない。そして、俺はつっこまれる役をやつしているから、つっこむほうは、かなりご無沙汰だ。別れたら、俺、もう、できへんかもしれへんな、と、そんなことばかり考えていた。

結婚なんてものは、自分にはできないものだと思っていた。というか、あまりやりたくないが正解だ。適当に遊んで付き合える相手を、変えていくほうが楽だからだ。それが、どうしても手放せないものを抱えてしまつて考えが変わつた。

抱えてしまつたのが、女だったら、結婚したいと言わなかつただらう。面倒だという理由で。俺は、べたべたと束縛されるのが苦手だ。適度に距離を置いてくれる相手なら問題はないのだが、そういう女性にお田にかかつたことはない。いや、最初は、距離があるのだが、どこからか、それが狭められて、仕舞いになくなる。学生時代に、いきなり部屋に来て、掃除なんて始められて閉口したことがあつた。掃除自体は有り難いのだが、料理を作るとかし始めて、まるで、その女のテリトリーかというぐらゐに侵食されてしまうと、俺は窒息するのだ。

ずっと喋つていることも面倒だし、何よりべたべたと擦り寄られるのが面倒だ。やるだけの関係なら、それでいいだろうと思ついたら、最初は、そもそも、やはり変化していく。俺が、女の所有物みたいな扱いになるのがイヤだつた。だから、もし、手放せないと思つたとしても、となり同士に家を借りるぐらゐのことになつたはずだ。

そういう意味では、浪速は理想的だつた。相手が俺より無頓着で、束縛が嫌いという相手だつたからだ。それなのに、俺にだけ馴染ん

でいた。ふたりして、同じ部屋で別々に過ごすのも当たり前、下手をすると食事も別々なんてこともあるほど勝手気儘で、時たま、俺が料理すれば、浪速は嫌がりもせずに食卓につく。食べたら、後片付けもしてくれる。そんな関係だ。

そして、浪速は放置すると、生きているだけの状態になるので、手をかけようと俺が動くことになる。でも、それで、浪速は感謝することもないし、べたべたとくつついでいることもない。それが、俺には何よりだった。傍に体温があるけど、それに束縛されることがないというのが、俺には有り難いことだった。

「おい、研修は、第一会議室やで、吉本。」

就職して、最初の一ヶ月は研修が、ほとんどだ。一応、部署は決められているが、そこに座っているのは一日の半分がいいところで、後は研修で同期一同で、知事や収入役の有り難いんだか、なんだかわからない話とか、実際の実務とかの勉強をさせられる。定刻には終るから、これで給料がいただけるというのは、申し訳ないほどだ。

「今日はなんやった？」

「正しい地方財政の知識とかなんとかやった。」

同期で仲良くなつたのは、隣りの課にいる御堂筋という男で、適当に付き合つには、ちょうどいい感じの男だ。それとつるんでいれば、聞き漏らしたことを、お互いに補完もできる。

「今夜、コンパらしいで。年上のおねえさんたちと。」

「え？ そなんか？」

「あれ？ 連絡行つてへんか？」

「およ？ いきなり、はみこが？」と、御堂筋はからかうが、実際は、俺が課内の連絡メールの確認をしていないだけだ。

「俺、バス。」

「そつか、ほんなら知らんかったで通しちゃ。」

御堂筋という男も、割と気楽で気良しで、付き合つのは楽だ。わざわざ、出るとは言わない。それで、俺がハミコになつても、こいつは気にしないだろう。

その日の研修の後で、予定表を貰つて、ちょっと顔色を変えてしまった。これから一週間、県内の施設を各人が研修という名目の雑用に借り出されるということだったからだ。それも、女性陣は自宅から通えそうな場所だが、男のほうは県境に近いような僻地ばかりだ。つまり、そういう場所の雑用を一年に一度やらせようという魂胆なのだろう。俺の行き先は、とんでもなく僻地で、隣りの県へ買い物に出たほうが早いような場所の、営林署事務所だ。

「なんで、地方公務員が、国家機関へ行かなあかんねん？」

「たぶん、人手が足りてないからやろ？」

もちろん、御堂筋も同様で、俺とは違う村の役場だった。一週間のうち、土日は休みではあるが、車がない俺は戻るには、バスしかない場所だから、かなり厳しい。

・・・・大丈夫かな・・・・

だが、行かないわけにもいかない。家に帰つて、同居人に、そう告げたら、「気をつけて。」と、だけ言われた。

「ちゃんと戻つてくる。」「

「わかつてる。」

その頃、水都は携帯を持つていなかつた。だから、電話するのは自宅しかない。毎日、声だけは聞かせようと思つていた。

けれど、営林署事務所の仕事は、かなりハードで、毎日とはいかなかつたし、同居人が帰りが遅くて捕まらないことが多かつた。一週間して、慌てて休みに戻らうとしても、仕事があつて戻れなかつた。

キッカケが何だつたか忘れたが、女と知り合つた。それで、その家の家に雪崩れ込んだ。相手は、ちょっと酔っ払つてるので、ぱつぱと服を脱いでいる。

「あなの。」

ベッドに飛び込んだ女の勢いで、もののすゞこ音がした後で、俺は口を開いた。

「今更、何？　あ、ゴムは、こい。」

「いや、そうやない。俺、ここにとひ、やってないから下手かもしれへんので、やって欲しい」とは言いつぶくれると助かるんやけど。

「え？　童貞？」

「まさか、この年で童貞やつたら怖いやろ？」

「できない事情があつたとか？　もしかして、お勤めでもしてた？」

「お勤め？　ムショには入つてない。やるほどの元気がなかつただけや。」

「不能？」

「それもない。ものすゞ下品やな？　あんた。」

「そりかなあー、と、女は大笑いしているが、「命令したげるから、はよおいで。」　と、手をヒラヒラと振つていて。まあ、どうにかなるやろ、と、俺も服を脱いだ。女って柔らかいなあーと女の胸に手をやつて、ちょっと感慨に浸つた。ここんとこ、硬い胸しか揉んでいいなし、自分から能動的に動くのもなかつた。やり方は似たようなものだが、何がが違うのは当たり前で、抱いても気分的にすつきりするということもないもんだ、と、感心もした。

「つまくないくじさ。その不満顔は、なんやろ？」

一回戦が終つてから、水分補給している女は、まつぱで俺の前に仁王立ちする。

「・・・ものたりへんのや。」

「じゃあ、一回戦？」

「もちろん、それはかまへんよ。でも、一緒やと思つわ。」

「あたしのテクがなつてない？」

「いや、それもちやうわ。強いて言つなら、俺が、こりこりセック

スと縁遠かつたからやと思つ。」

「どんなセックス？ もしかして、縛れとか言つ？」

行きすりの女なので、別に隠すこともないだろ。それに、こんなに明け透けに言わると、反って言いやすい。

「俺、ここ一年くらい男としかしてへんかったんだよ。」「え？」

「それも、俺、女役してたからな。せやからものたりへんのや。」
女は、あんぐりと口を開いて、それから馬鹿笑いを始めた。「信じられへんつ。」と、何度も言うて、俺の裸の肩をパンパンと叩く。

「いやあーネコの人とやるなんて貴重な経験やわ。」「ネコ？」

「女役のこと。ちなみに、男役はタチ。これ、レズでも一緒やから。・・・えーっと、つまり、普通のセックスができるか試してみたといふことやろか？」

「そうやな。できる」とはできるってわかつたわ。」

だが、あんまり満足できる気分ではなかつた。すっかり、抱かれるとこに慣れてしまつているらしいとは確認できただけだ。

「今、フリーなわけや？ ネコの人。」

「いいや、一週間、留守なんや。俺の旦那。」

「ほんで、浮氣してんの？」

「浮氣なあー、これは浮氣つて言つんやううか。」

「まあ、浮氣やと思う。でも、一週間限定なんやつたら、しばらく相手してもええよ。あんたみたいんは珍しいから。」「

一人で家に戻るのが億劫だつた。ついでに、適度に運動して、ノーマルな性生活というのに慣れるのもいいかも知れない。もしかしたら、そのうち、終わりが来るかも知れないのだから、また、こういう生活になるのかも知れない。予行演習をするには、この女は、いい相手だとも思った。

「ほな、頼むわ。」「

「とりあえず、名前聞いとこか？ ネコの人。」

「タマ言つねん。」

「へーーータマなんぢ。ほな、タマ、おいで。」

「おまえこや、なんて言つんぢ?」

「ミケでどう?」

「ふーん、ミケ? ここにのボケやのー。」

「あんた、自分のほうがここでこちやつていうんよ。」

ふたりして大笑いして、またベッドに戻った。まだ、一週間先にしか帰つてこない相手のことは考へても仕方がない。適当に待ち合わせて食事して、それから、女の家に戻つてやるという毎日のうつりで、ゆくぐつと俺は同居人のことを忘れていく。

一週間して、俺は、女に、「ここに住み着いてもええか?」

と、尋ねた。女のほうは、気にした様子もなく、「好きにしてええ。」

「と、合鍵を差し出した。

「ほな、着替えとか取りに行くやろ。 クルマ出すわ。」

「悪いな。」

「かまへんかまへん。ここにと、奢つて貰つてばっかりやからなあ、タマに。」

「ミケの家使わしてもうつくるから家賃やと想てくれたらええ。」

クルマで、自宅からスーツと着替えを、いくつか運んだ。女もついてきたので、名前がバレた。「水都やなんて、かわいい名前やんか、タマ。」と、女は笑って、自分の名前も公開してくれた。千佳は、とてもおおいかで優しい女だと思った。

それから、一度も自宅だと思つていた場所には帰らなくなつた。

「そろそろ一週間やけど、旦那はええの?」

女がそう言つので、俺は、「旦那つて、誰?」と、答えた。

「え？」

「俺、男やで？ 旦那つて、おまえのか？ それ、俺と違つんか？」

「

「ええ？」

千佳は、ものすこい顔をしていたが、俺には、何のことやらだ。そろそろ、籍でも入れなあかんかなあと、俺は考えていたのだが、別の相手がいるなら家から追い出されるかもしれないな、と、ちょっと落ち込んだ。

異変というのとは違つたが、こいつ、どうかおかしいと気付いたのは、昨日のことだ。一週間限定の相手をすると、互いに確認したはずなのに、それを忘れていた。ついでに、ネコをやつていた水都は、それすらも忘れているし、さらに怖いのは、自分が旦那持ちの男だということすら忘れているのだ。水都の家には、表札がふたつ並んでいて、どちらも男性名だった。それに、何度もやつていれば、明らかに、水都は抱かれるほうの立場だとわかつた。それなのに、当人は、それを、すっぱりと忘れている。たかが一週間で、そんなことは可能なのだろうか。

今日なんて、とんでもないことを言つ出したので、絶句した。入籍したほうが、はつきりしていいのではないか、と、言つのだ。

「あんた、正氣？」

「なんで？ 同棲して、それでやることやつてんねんから、それが正しい流れやつ？」

「家に帰つて、事実を自覚したほうがええんぢやう？」

「家？ 俺の家、じいやう？」

「はあ？」

記憶喪失ではない。ちゃんと仕事はしているらしいし、こちらのことも理解している。ただ、旦那のことだけが抜け落ちているのだ。

それはもう、はっきりすっぱりと。

「吉本花月って名前は？」

「え？ 大学の同期やつたと思うけどな。」

さすがに、これは演技ではないと背筋が寒くなつた。最初の夜に、旦那がいることを告げた水都は、とても嬉しそうに、旦那のことを言つていたからだ。それが、名前を出しても、そんな反応しかしないのはおかしい。もしかして、別れたかったのか、とも、いぶかしんだものの、「家に帰つても寒いから。」と、一週間限定の約束をした時は寂しそうに笑つっていた。何が、どうなつたら、こうなるのかわからない。当人が、そう言うのなら、しばらくは、じつに遊びのつもりで付き合ひつか、と、腹を括つた。

だが、そうではないことにも、すぐに気付いた。真夜中に、悪戯してやつたら、「花月、もっと。」と、嬉しそうに呟いたからだ。

・ · · · ·なぜ？ · · · ていうか、どうなつてるんよ？ これ · · ·

相手は、一週間限定で出張だと言つ。ならば、そろそろ戻つていいだろう。直接、相手に問い合わせし、別れ話がこじれているのか、痴話喧嘩なのだとしたら、早々にお引取り願いたい。幸い、自宅の場所は覚えている。今夜にでも出向いてくるか、と、朝の出勤前に、ダイニングテーブルに座つている水都に、「今夜は、会社の宴会やから遅くなる。」と、告げて出勤した。

一週間ぶりに、我が家に帰つたら、誰もいなかつた。いや、なんていふうか、誰も住んでいない部屋になつていてが正解だ。生活感が一切ない。あのボケのベッドのシーツが、綺麗なままだ。ゴミ箱も、おそらくは一週間前の吸殻と思しきものしか入つていない。

・・・・どうこうことや？・・・・

もしかして、あつちも出張か？と、思つたものの、そんなものはないだろう。連絡すれば、ヤブヘビになるから、おいそれと職場に確認するわけにもいかない。もしかして、俺が帰るまで、向こうの職場の寮へでも避難したかと、良いほうに考えて、とりあえず洗濯物を洗うこととした。それから、食べるものもないので、仕方ないから、コンビニで行つて、適当なものを持つてることにした。

もし、この週末に帰つてきいひんかつたら、職場へ押しかけるか、と、コンビニで、そんなことを考えつづ、メシだけ買った。あのボケは、仕事だけは休まないようにしているから、そこには確實に居るはずだからだ。

・・・やつぱり、携帯持たせたほうがええかな・・・・

いや、今回の場合は、携帯があつても圈外であつたから意味はないのだが、それでも、これから連絡を、すぐにつけられるという利点はある。どこにいるのかわからないのでは、話にならない。

・・・あんまり出張とかないとは思うけど・・・・

度々、こんなことになるのなら、出張がない部署に転属するほうがいい。たぶん、あのボケは食べていらないだろうし、また、生きているだけ状態になつているだろ？。具合が悪くなつていないこと願つてゐるが、一週間は長すぎる。

ふう、と、溜息をついて、ハイツの階段を登つたら、俺の家の前に誰かが立つていた。

「水都つづ？」

慌てて、近寄つたら、まつたく見ず知らずの女だった。しかし、その女、あらうことが、俺に向かつて、「じあほつ、遅いんじやつつ。」と、叫びやがつた。

「はあ？ あんた、誰？ ていうか、俺、喧嘩売られてるんか？」「浪速水都の旦那？」

「え？」

「さつさと質問に答える。」のあほ。」

ものすごい剣幕なので、「せや。」と、俺が頷くと、「水都と喧嘩した？」と、さらに尋ねられる。

「え？ 一週間逢うてないから、喧嘩なんかできへんぞ。て、あんた、水都のこと知ってるなんか？」

「知ってるも何もつ。ちよつと聞きたいねんけどな、水都は、どつかおかしいとこある？ いきなり記憶喪失とかなるような体質なん？」

「はあ？ 記憶喪失？ エ？ あいつ、入院とかしてるんか？ ビつか怪我でも？」

そうかそうか、ぼおーっとしどりて交通事故にでも遭うたか、と、俺は慌てたものの、安堵した。そういうことなら、いないのは当たり前だし、俺に連絡が来ないのも仕方がない。だから、俺は籍を入れようと言つたのだ。こういう時に、困るから。

家の鍵を開けて、慌てて保険証と着替えの準備をしようと思つたら、女が、ちやうぢやうと、俺の腕を掴んだ。

「うちに一週間居つてるんよ。そやけど、おかしいんよ。水都、あんたのこと知らんつて言つたよ。それに、いきなり、あたしと結婚するとか言つてつ。あれ、どつか絶対におかしいつ。あれは病気なん？」

女の切羽詰つたような言葉に、俺は一端、凍つた。

・・・・・ 結婚？

以前、水都が考えていたことだ。生きている間、家族というものがあるべきだから、さつさと結婚して子供でも作つて生活するのが

普通だと、と、考えていた。それは、非常に正しい意見なのだが、それには根本的な欠陥があった。水都は愛している相手と結婚するというのではなくて、言い寄ってきた相手と結婚すると言つたからだ。結婚の意味がわかつていないと、俺は叱つたが、水都には、それがわからなかつた。かなり壊れないと判明したのは、そんなことがわかつてからだ。

・・・・また、戻りやがつたな、あの野郎・・・・

元の状態に戻つてゐるらしい。たぶん、この女と、どうにかなつたから、それで結婚してしまえばいいとも思つてゐるのだろう。そんなものは幸せではない、と、俺は何度も言つたのに・・・そして、結局、俺は、その水都だからこそ、一緒にいることを選んだのに、それすらも記憶から抹消するつもりでもあるのだろう。

「ちょっと、こんなどこで、フリーズしてゐる場合やないのつつ。答えてつづ。」

「ぼおつと立ちぬくした俺の胸に、思い切り裏拳を入れて、女が叫ぶ。そら、混乱するだろう。遊びのつもりだったろうに、いきなり結婚とか言われたら、誰だつてビビる。

「あれ、壊れてるねん。あんた、遊びで付き合つたんやろ?」

「そう。一週間限定でつて、最初に約束したんよ。ネコの人なんて珍しいし、それなりに顔も好みやつたから。・・・壊れてるつて何?

？」

「えーっと、うちのネコの人な、普通の家庭を築いて生きているのが幸せなことやと思てるんや。相手のことが好きやから一緒におりたいとか、そういうんではなくて、形式美に憧れてるつちゅーか、なんていうか。・・・て、あんた、なんぼほどストレートなんや? ネコの人つて、おじつつ。

「あんたのこと言つてもわからへんねんで? あんたら、カップルなんやろ?」

「だから、俺が一週間も留守したから、俺があらんことに耐えられへんかったから、さらに壊れたといつてちやうかな。」

俺のことを忘れれば、俺の代わりが必要になる。ひとりが好きだつた水都に、一人は寂しいと、俺は教えてしまった。だから、一人が楽だという感情が水都からはなくなつた。その代わり、誰かが傍に居ることが必要になつた。

「・・・やつぱり、一週間つてあかんねんな。」

「一週間で忘れられるわけがないやろつ。」

「いや、あいつならできると思うで。ほんで、あんたは、結婚するつもりはないんか？一応、老婆心から言うが、あいつは、好きとか愛してるなんてことは思てないからな。」

「できるかあああああ。」

「まあ、せやろうな。でも、あいつ、俺を忘れてるんやつたり、このまま、じわじわと侵食していくと、あんたのことが好きになると思うで。そういう生き物やから。」

「どあほつ。あれは、ネコの人つ。ネコがタチやつて満足するわけないやろがああつ。ネコは入れられて、なんぼじやつ。」

「うわーストレート剛速球に下品やな。」

あけっぴろげた意見に俺は大笑いだ。どう見ても、俺より、ちょっと上くらいの女なのに、どこかおつさん臭さがあるような勢いだ。こんな女だから、水都も自分のことを話したんだろう。これだけはつきりと言われたら、こっちもはつきりと言いたくなる。

「方法はいろいろあるで？」

「そんなことはええちゅーのよつ。それより、あんたに質問。」

「おう。」

「水都はいらっしゃる子？」

「いいや。ものすごくいる子。」

「あんたら、別れ話とかは？」

「そんなんあるわけない。あいつ、俺と暮らしてると血体が同居

というレベルにしか考えてないで？」

「でも、やる」とはやつてんねんやろ？」

「そら、まあ。」

「水都が好き？」

「うーん、好きとかいうレベルではないねん。傍におつて欲しいんよ、俺としてはな。水都の世話しないと、どうも調子が狂う。」
あれが、傍に欲しい。たぶん、水都も深いところでは、そう思つてゐる。自覚はないだろうが、本心は知つてゐる。だから、愛してゐるなんて言つて欲しいわけではない。ただ、傍におつて、寬いでくれてたら満足やと俺は思つてゐる。その程度の距離にいられるのは、俺しかないと自負している。

俺が、うつすらと笑つたら、女は、ふんつゝと鼻息であしらつて、「わかった。」と、ダンと床を踏み鳴らした。

「ほんだら返す。でも、あんたのこと忘れてることを、どうしたらええの？」

「さあ、まあ、とりあえず、うちに拉致して、徐々に慣れさせるとかでええかな。」

「それやつたら、部屋を提供するから、やつて。」

「え？ いや、見ず知らずのあんたの家でやんのは、ビリみ？ 俺、公開エッチとかしたいほうとちやうし。」

とりあえず、酒でも飲ませて、久しぶりに泣き虫にでもなつてもらつか、と、俺は笑つた。あまり使いたくはないが、忘れてしまつたなら、奥底の本物の水都に尋ねるしかない。俺が必要か、そうでないか。必要であるなら、拉致でもして馴染ませてやることはできる。

「うちの人な、心が繋がつてないねん。」

ほんま、なんで、一週間で忘れるんやううと、俺は、また苦笑する。生きてるだけの人生なんて意味がないつていうことが、心の奥ではわかってるくせに、それが表まで辿り着かない。

「なんとなく意味はわかつたわ。ほんと、具体案は？」

「ていうか、あんた、ほんま、変わった人やな？ あんなボケを、よう保護してくれたで。」

「しゃーないやんかつ。夜中に悪戯したら、『花月、花月』って、

何度も嬉しそうに抱きつかれたら情も湧くわっつ。・・・あ――

―むかつくつ。あんた、一発、殴らせてっつ。

と、言いつつ、その女は、カバンで俺を殴った。許可出す前に殴つてるしな、この女。なんで、また、こんなけつたいな女を選ぶかな、水都は。

会社の飲み会があるとかで、いつもより遅く戻ってきた千佳は珍しい男を連れて来た。俺の大学の同期で吉本という男だ。同じ語学の授業をとつていただけの知り合いなので、顔もうろ覚えだが、一応、挨拶されて思い出した。

だから、第一声は、「あんた、誰？」と、言つてしまつたら、吉本は微妙な顔をした。それほど親しい間柄だつたわけではないのだから、覚えていただけでも有難いと思つてくれ、と、内心でツッコんでおいた。

「なんで、吉本が？」

「あたしの同僚。たまたま、話したら、水都と知り合いやつてわかつたの。」

「『あんた、誰？』はきつつい一発やわ、浪速。」

「しゃーないやろ？ 語学で一緒しただけやのに、一々覚えてられるかいな。」

だが、どうしたことが、唐突に、俺は涙腺が緩んだ。田にゴミでも入つたのか、いきなり涙が溢れてしまった。

「あれ？ なんで？」

「いやあー、そんなに吉本君と再会できて嬉しいのん？ 妬いちゃうよーんつ。」

「おーおー、千佳。それはないやね？。」

自分でも、どうして涙なんて零れるのか、わからない。顔を洗つてくると洗面所に逃げた。なぜ、吉本の顔を見たら、涙なんだ？と、混乱するしかない。

気持ちを落ち着けて戻つたら、いきなりビールとか乾き物とかが食卓に乗せられていた。久しぶりの再会なので祝宴だーと、千佳と吉本は盛り上がっている。

「はい、ほな、乾杯。」

缶ビールを手渡して、カチンと顔をさせた吉本は、嬉しそうに、それを飲んでいる。

「俺は別に嬉しいないで？」

「まあまあ、世間が狭いつてことを祝おうやないか。」

「そうそう、なかなか大学の同期なんて卒業したら音信普通なんよ？ 水都。」 うのは、祝うべきやから。」

どうせ、明日は休みやから、無礼講モードで、と、むらむら、千佳が盛り上げる。俺は、それほど飲むほつではないから、ちびちびとビールを啜つているが、千佳は豪快だ。ぐいっと一気に空にする。「なんで酔わへんの？ 千佳は。」

「女のほうが、アルコールの分解量は多いもんなんよ。ほら、水都。そななまずそうに飲んでんと、『ぐぐぐく』って。」

当たり障りのない世間話をしながら、急かされるよつて、缶ビールを空けた。まあまあ、もう一本と手渡されて、少し気分が軽くなつて、『ぐぐぐく』と飲んでしまつたら、急に酔いが廻ってきた。

「氷食べるか？ 水都。」

「・・うん・・・」

「千佳ちゃん、氷作つてる？」

「ごめーん、作つてない。」

「うーん、水やと覚めへんのよ、こいつ。」

「ていうか、水都、こんなに弱かつたかな。もうちょっとといけてたはずやけど。」

そういうや、缶ビール一本ぐらひで、こんなに目が廻るなんていう

のは、久しぶりだ。仕事で飲んでいる時は、大瓶三本くらいまでなら付き合っている。というか、その会話に、どこかでひつかつた。

・・・なんで、吉本が、そんなこと言つねん？・・・

とりあえず、ちょっと横になれ、と、俺は身体を支えられて床に寝かされた。

「俺の嫁は、なんで、そんなに壊れてるんかなあ。かなんなあ。」

吉本が、そう言って、俺の頬を撫でたら、急に何かがパリンと割れるような気分になつた。あとは、ただ、温かい気分の浸つたと思う。

なるほど、と、千佳は感心した。心が繋がらないというのは、こういうことが、と、涙が流れて呆然としている水都を目にして納得した。たぶん、逢いたかつた旦那の顔が見られて嬉しいのだろうが、それを自覚できないうらしい。それから、乱暴に飲ませて酔わせることにして、それも呆氣なく酔っ払つたのも驚いた。

道すがらに打ち合わせてして、コンビニに買い物してきた。吉本も酒には弱いというので、彼の分だけノンアルコールビールだつた。それが、わからないように種類をたくさん買い込んで来たから、水都は気付かない今まで飲んでいる。

「あいつ、銘柄とか気にしてへんから気付かへん。」と、吉本が言つた通りだ。全然、そんなものは気にしていないし、会話も、おざなりに付き合う程度だ。関西人という人種は、こういう時、便利だ。まったく知り合いでなくとも、ノリで適当に会話できる。だから、盛り上がりつていてるフリで、吉本と会話を続けていたら、水都は缶ビール一本で、ふらふらと揺れだした。

「横になれ。」

身体を支えて、吉本が床に寝かせる。座布団で枕まで作るのが、

かなり世話好きであるという証拠にもなつていた。それから、ふうと息を吐いて、「俺の嫁は、なんで、そんなに壊れてるんかなあ。かんなあ。」と、苦笑して水都の頬を撫でたら、唐突に、本当に唐突に、水都は起き上がつて、吉本に抱きついた。

・・・え？・・・

「花月つつ、花月つつ、どこの行つてたん？　なんでおらへんのつつ

?　俺、消えてまつやんつ。

泣き喚くみたいに、わあわあと同じことを繰り返して、吉本の首にしがみついている。吉本のほうは、ほつと安堵した顔になつて、起き上がつてきた水都の背中を撫でている。

「「めん」めん、仕事で出張やつた。「めんな、水都。」

「いややつて言つたのにつつ。花月、おらんとあかんのこいつ。」

「うん、せやな。俺が悪いな。もう思い出したか？」つい、帰るか?

?

「・・うん・・帰る・・ひとりいやや・・・

「ひとりにはせえーへんよ。ちやんと帰つて来るから。」

「・・うん・・・」

その光景に、うわあーえらいもん見せられるなあーと笑つてしまつた。といふか、この顔の水都を知つてたら、そら、あんた、結婚して縛り付けとこうと思つわな、と、納得もした。たぶん、酔つて出来た言葉が水都の本音というもので、えらくクールな男やと思つていたら、とてつもなく甘つたれなネコだったのだ。

「確かに、このギャップは萌える。・・・セヤけど、あたしと飲んでる時は、こんなにならへんかつたけどなあ。」

この一週間、結構、飲んでいたはずだ。こつちに付き合つていたのだから、ビールの大瓶を何本か空けていたのだ。だが、その時の水都は、こんなことにならず、終始、ほろ酔いぐらいで穩かだつた。独り言のように呴いたら、吉本が、「これは、俺専用の顔やからな。」と、嬉しそうに返事してきやがつた。水都を抱かえてなかつたら、蹴り入れたるところやけど、水都がまだ、ぐずつてはいるので、さ

すがに控えた。

「千佳ちゃん、悪いねんけど、タクシー呼んでもらえへんか？」
ぐすぐすとひつついでいる水都をあやすようにして吉本が頼んでくる。大人一人を抱えて帰れる距離ではないから、そういうことになる。

「あー、それやつたら、うちの車で送つたげるわ。」

「ええんか？ 悪いな。助かるわ。」

「いや、ええもん見せてもらひた礼とこうことど。」

「自分、ほんまに図太いな？ 普通、ホモの愁嘆場なんか見たら退くで？」

「そのネコの可愛さが救いやろな。」

「ああ、うちの嫁、可愛いやろ？」

「あんた、それ、水都、寝かせて、ちょっとこっち来い。」

「いや、遠慮する。」

ちつちつ、見破つたか、と、笑つて駐車場からクルマを出してくるために、家を出た。戻つたら、水都は寝ていて、吉本が担ぐようにして車に乗せた。後部座席へ転がしておくのかと思つたら、本人も、後部へ座る。寒くないようになつて、と、自分の上着をかけているのが、いつそ清々しいほどに、いぢやいぢやだ。

「荷物は、また引き取りに行かせてもらうから。」

「そうしてくれるかな。・・・あのさ、ちょっと聞きたいねんけど？」

「なんやろ？」

「もしかして、今度は、あたしが、『あんた、誰？』になるわけ？」

「

「うーん、たぶん、そななるんちゃうかな。実際、現場を見たことはないけど。」

「お礼にエッチ見てもええ？」

「え？ 本気か？ 勘弁してや、そんなん。萎えるで。」

「混ざらしてもろてもええけど。」

「・・・千佳ちゃん・・・それ、本気やないよな？」

「やつたことないから楽しいかと思つて。いや、普通の三人はあるよ。でも、ほら、普通やないやんか？ そんなん見られることはないやうう。」

かなり興味はある。世間に、そういうビーテオが出回つてゐるが、さすがに、そこまでして見たいものではないが、機会があるなら是非、とは思つた。だが、吉本は、大袈裟に溜息をついて、「あんな、俺が言うのも変な話やと思うけどな。遊んでばかりあるんもどうかと思うで。」と、説教じみたことを言い出したのには閉口した。

「水都みたいなんは、あんまりおらんやうけじや。もつと暴力的なヤツとかと当たつたら、どうするつもりなんよ？ もし、俺が死んだりして、戻つて来られへん事態で、水都が、あんたのとこへ転がり込んでたら、こんな簡単には解決してへんねんで？」

「人を見る目はあるつて。ていうか、こういうあたしやつたから、びびつて追い出しあせんと飼うといったげたんやろ？ あんたこそ、しつかりしいーよつつ。」

いや、おもしろいエッヂはしていたから、そういう意味では、あのネコを飼つておく価値はあつた。だいたい、普段なら家まで、お持ち帰りはしない。そういう意味では、水都は好みにも合つていたからだ。

「ぶつさこくなんは、ホモでもゲイでもええわ。いや、むしろ、なつとけやけど。せやけど、なんで、水都みたいな好みの男まで、そつちかなあ。」

「それ、差別しちゃ。・・・あ・・・千佳ちゃん、飲酒運転やんけつつ。」

今まで、気付かないといつことは、鈍いらし。缶ビール一本や三本では、どうといつこともないし、飲酒検問をやつてゐる時期でもないから、問題はない。

「大丈夫、大丈夫。ほら、もう着くわ。」

「コーヒーでも飲んでけよ、千佳ちゃん。ちょっと冷ましてからの

「ほうが安全や。」

「ネコの旦那、あんた、お人よしどか、人から言われてへんか？
はあ？」

今から熱い抱擁とか、楽しいエッチが待っているはずの吉本は、それより他人の心配が先という、昨今珍しい気良しであるらしい。
・・・いや、だからこそ、こんな厄介なネコを飼うてるんやろうけど・・・

「ほら到着。さっさとエッチして、完全に記憶を取り戻せつつ、ネコの旦那つつ。」

「いや、それは、ええねんけどや。」

「大丈夫やつて。他人の心配している暇があつたら、自分のネコのことを心配しとれつゝ、このどあほ。」

さっさとクルマから出る、と、脅して、ドアがしまった途端にバツクした。まだ、何か言いたそうな顔をしていたが、それは無視だ。ひとりになつて、世の中は広いわ、と、しみじみとした気分になつた。あんな変わった生き物が存在して、それが、旦那持ちの男で、さらに、その旦那が気良しとくると、なんていうか、世の中、何があるかわからんもんやと思われた。

酔っ払いの千佳ちゃんは、堂々と、そのまんま帰つて行つた。あの飲みっぷりからすると、たぶん、酔つてはいないだろうが、それでも、ちょっと気になつた。一週間、水都の相手をしてくれたのが、あんな変わった女というので、よかつたと思う。普通の女やつたら、騙されただろう、確實に。

そして、当人は、すやすやと寝ているので、そのまんま抱き上げて、ハイツの階段を登つた。鍵を開けるのに難儀はしたが、とりあえず、ベッドに転がす。

・・・あんまり他人には見せたくないなかつたんやけどなあ・・・
奥底の水都は、とても可愛い。たぶん、今まで、俺しか知らなかつた。千佳ちゃんに見せたのは緊急事態だつたとはいえ惜しいとは思う。

・・・明日起きたら、徹底的にやつたるからな、覚悟しとけよ、水都・・・・・

さすがに出張一週間で、せらり、嫁の捕獲に出たから疲れた。俺も、そのまんま嫁の横に入り込んで、目を閉じた。

翌日、かなり昼近い時間になつて田が覚めた。もちろん、寝汚い俺の嫁は起きる気配もない。とりあえず、シャワーでも浴びて、すつきりするか、と、起きだした。あの様子では、あのまんま寝ているだろうと思っていたからだ。しかし、風呂場の外で、ものすごい音がして、力一杯、風呂場の引き戸が開けられた。

「なんよ?」

「・・・あ・・・・・」

「おい、寝ボケとるんか? 水都。」

ワイヤーシャツにスラックスという出で立ちで水都は、泣きそうな顔をしていた。無理もないのだが、思い出させないために、何も言わなかつた。黙つたまま、シャワーがジャージャーと流れているところまでやってきて、俺に抱きついた。

「・・・おかえり・・・・・」

「ただいま、俺の嫁。」

「・・・あなたのな・・・・・」

「うん。」

「今すぐに、やってほしいねん。」

何が、と、聞くだけ野暮ぢやうつ。千佳ちゃんの証言によると、俺の嫁は、「ものたりない」という感想だったという。そらまあ、そうなのだ。普段、やってこることをしてもらえないのだから、物

足りない」という感想になる。一応、千佳ちゃんは、それなりのことはしたらしいが、まあ、それは満足できるものではなかつたはずだ。

「やさもひ、喜んで。でも、おまえもシャワーは浴びて洗え。」

「・・・ああ、せやな。」

とりあえず、シャワーを浴びてから、俺の嫁が、「もう充分や。」と言つまで、やり続けた。メシも飲み物もない状態だと、俺の嫁は、ふらふらになつてしまつ。明日は、日曜やから、ゆっくり沈没させておけるから、と、俺も容赦しなかつた。この形に馴染んでしまつたのは、俺も同じだ。抱けることは抱けるだらうが、たぶん、相手の到達地点がわからなくなつていろだらうと思つ。

「男つて、わかりやすいよな。」

「・・・ん？・・・なあ、花月・・・もひ、ええ・・・なあ、もひええつて・・・もう、いやや。」

「いややわー水都さん、熱烈に誘ってくれはつたんは、あ・ん・た。全力で、ご奉仕させてもらいますうー。」

「・・・あかん・・て・・・俺・・もひ・・・しんどい・・・」

「はいはい、まだ、いけるで？ ほら～。」

「・・・いややつてえええ・・・」

徹底的にやつてやるつもりで、手加減はしなかつた。忘れたといふなら思い出させておけばいい。また忘れても思い出させればいい。そのうち、水都は本格的に泣き出して、それから潰れた。強烈な記憶で上書きすれば、その前のことなんて押し潰されてしまつ。

・・・しゃーないよな？ おまえは壊れてるんやから・・・・・

ぱろぱろに泣いた顔を覗き込んで、「一週間か。」と、その記

憶の保存時間については肝に銘じた。一週間が、たぶん、ひとりでいる限界なのだろう。

「いや、違つか。千佳ちゃんが一週間つて約束したつていうてたもんな。・・・・・一週間つて言つたのが悪かつたんか・・・」

知り合つて三年、付き合つて一年、同居して半年も経つていない。だから、その限界の時間は延ばすことは可能だらう。

「とりあえず、こいつを洗つて、メシの支度するか。あーあーシーツは廃棄したほうがええかな。」

どろどろという雰囲気のシーツと、すっかり陽が暮れてしまった室内を見回して、俺は立ち上がった。

夢現で、口に水分が流れてきた。それから、ゼリーみたいなものが流し込まれていて、目を開けたら、花月の顔があった。

「おはようさん……ていうても、真夜中やけどな。」

「・・・うん・・・・」

「腹減つてゐやろ? とつあえず、ゼリー食べ。ほんと、本格的に目が覚めたら、うどん食べさせたるからな。」

「・・・うん・・・・」

出張から帰ってきた花月は、ほほ一皿、やつまくつてくれた。いや、誘いはしたが、そこまでしてくれ、といった覚えはない。ただ、この一週間の記憶というのが、すっぽり抜け落ちたように思い出せない。たぶん、何にも考えてなかつたのだろうな、と、血潮するしかない。

壊れていると自覚したのは、たぶん、花月と出合つてからだ。いや、それ以前には感情が欠落しているな、とは思つていたが、それほどとは思つていなかつた。

カタンカタンと台所で音がしている。うどんでも煮ているのだろう。マメだと思うが、あれも一種の病氣かもしない。たかだか、一田や一田、メシを食わなくとも人間は死んだりしないのに、食べないと鬼神も真つ青なほどに怒るのだ。

トイレに行こうと思つたが、腰がだるくて起き上がりがない。下半身の感覚が、あやふやすきて、起きたところで、そのまんま倒れそうだ。

「・・・おーい・・・・・」

叫ぼうとしたら声が枯れていた。ベッドの下に落ちてゐる本を、苦労して掴んで、それを扉に投げた。ぽんと鈍い音がして、それから足音が近づいた。

「なんや?」

「・・・トイレ・・・」

ああ、と、花月が肩を貸してくれてトイレまで運んでくれた。

「腹下してないか？」

「・・・いや・・・洗ろうてくれたんやろ？」

「一応、洗ろたけど、時間経つてからやからな。途中から「ム」使つたし。」

「・・・なら大丈夫や・・・ていうか、加減してくれ。そのうち、ヘルニアになりそや。」

「はははは・・・せやな。」

文句を言つても、相手は堪えている様子は皆無だ。用を足して、連れ戻されてから、うどんを食わされた。食べたくない、と、拒否しても無理矢理、ねじ込まれるので、途中で諦めて口を開いた。ちょうど、満腹した頃に、お茶を飲ませてくれるのが、慣れというものがなんだろう。

「クスリいるか？」

「・・・ん?・・・・・眠い・・・・・」

「さよか。」

するすると、花月が、うどんを啜つてゐる音がして、なんだかんだと出張の苦労について語つてゐる。植林した苗を鹿に食られて、やり直しさせられたり、熊が出たとかでパトロールに行かされたり、都会では考えられない仕事ばかりだ。

「ほんでな、梅雨時分にも、マツタケが生えるらしいわ。」

「・・・ふーん・・・・・」

「おみやげに、山菜と、干した鮭魚とか貰ひたから、明日は山菜」
はんにするで。」

「・・・うん・・・・・」

「一週間は長かったわ。」

「・・・せやな・・・・なあ、花月・・・・・」

「ん?」

「・・・俺・・・・・一週間・・・・何してたか思い出せへん・・・・・・・・

「もう、あかんわ。」

「それは、どういう意味の『あかん』なんや? 水都。」

「・・・おまえおらんと・・・壊れ具合が激しなって・・・時間も何も・・・わからへんのや・・・消えることがな・・・あるんやつたら・・・早めに言ひてや?・・・」

花月がいなくなつたら、俺は盛大に壊れてしまふだひつ。それは、生きているだけの状態なので、至極、楽な生き方ではあるだひつ。だが、以前は、ちつとも感じなかつた寂しい気分をくれるような気がする。誰かと結婚しても、それは消えないのだと思つ。これは、となりで、うどんをかつ食らうヤツがあるからこゝや、感じなくてよいからだ。それぐらいは、壊れている俺でも、わかる道理だ。ひとりで、ベッドで日が覚めて、なんだか恐慌に陥りそつになった。今まで、そんなこと、感じたこともなかつたのだから、そういうことだろつ。

「あほ、もう、寝てまえ。」

「・・・なんでやろな?・・・」

「んな」と、わかりきつとるやないか。俺が嫁にしたからや。「

「・・・ああ・・・そうか・・・納得や・・・なあ、花月。」

「ん? まだ、なんかあるか?」

「・・・もう一回・・・頼むわ・・・」

「え? 珍しいことを言う。」

「はははは・・・ほんまやな・・・」

ぐだぐだに疲れて眠りたいというのではなくて、ただ、体温があると感じていたかった。ちょっと、待て、という声で、うどん鉢を花月は運んで行つた。元気やなあーと、俺は、おかしくて笑いつつ、待つていた。

・・・籍入れるのは勘弁やけど、体温は欲しいなあ・・・

そんな、身勝手なことを考えていたら、となりに体温ができた。もう、腰も足もぐだぐたなので、されるがままになるしかない。平たい胸が重なつて、心臓の音が響いている。以前、女とやって

た時には、それを嬉しいなんて感じたことはない。

さすがに、体力限界まで追い込んだら、死んだように寝て起きなくなつた。こちらは、午後近くに田が覚めたが、水分だけ補給してやつたら、また、じっくりじっくりと寝ている。夕方には、田を覚ますだろ？から、晩飯の支度をしつつ、家事をこなした。誰もいなかつたので、部屋は汚れていなかつたが、それでも、掃除機ぐらいはかけておく。三時頃に買い物に出ようとしたら、ピンポンと呼び鈴が鳴つた。

「あれ？」

「荷物運んできた。」

大きな紙袋をふたつ持つた千佳ちゃんだった。どうせ、まだ起きないだろ？が、部屋に上げるのは気が退けて、紙袋だけ受け取つた。

「水都は？」

「死んだように寝てる。・・あの・・よかつたら、茶でもしばかへんか？俺、買い物に出るつもりやつたから、なんか奢らしてもらう。」

「あげてはもらえへんわけ？」

「わざわざ、忘れさせてんのに、思い出やあよつた真似はしたない。」

「なるほど。ほな、奢つて貰おつか。」

納得はしたらしく千佳ちゃんは、それ以上に無理強いはしなかつた。寝室の水都に、買い物に出ることだけは告げて、財布を手に外へ出る。本日も、車だった千佳ちゃんに、近くのスーパーまで乗せて貰つた。スーパー近くのファミレスで、お茶にする。気の利いたカフェとかあればよかつたが、うちの近所には、そういう小洒落た

店はない。適当に注文してから、俺は、礼について尋ねた。千佳ちゃんのところで、寝泊りしていたのだから食費とか、いろいろと金はかかってるだろう、と、思っていたからだ。けれど、千佳ちゃんが言うて云々、食事が、ほぼ外食で、それは、水都が出ていたから、別に、金銭的には必要ない、とのことだった。

「気前のええ兄ちゃんやなあーと思つてたんよ。」

「そしたら、どうしたらええ？ ガソリン代ぐらいでええか？」

「うちまで、何度も往復してもらつているから、ガソリン代ぐらいは払おうか、と、言つたら、それも却下された。

「お金はこりんよ。まあ、一週間、それなりにおもしろかったから、それでキャラでええんとちがう？」

「そういふもんなん？」

「そういふもんでしょ。普通、遊びでやつてる時こそ、必要経費請求するようなことは、ないからな。」

「俺は、そういう遊びはしてないんで、ようわからんのよ。」

「やべ、あんた、氣良しのあんたでは、やつたら、即結婚とか言い、そりやもんな。・・・まあ、そういうのは、忘れてくれたらええし、水都が、何も覚えてないんやつたら、それでええんと違う？」

すつかりと、水都は一週間の記憶を飛ばしている。何をしていたか、わからぬこと言つのだから、千佳ちゃんのことも忘れているだろう。

「薄情な人間やと思わんといでな？ あいつ、壊れてるから。」

「それは、おとついの夜に、イヤといつほど理解した。で、あんたが、ものすごく冷静なんが、不思議ではあるけどな？」

「え？」

「だつて、浮氣されてさ、それで、その相手に冷静に、かかつた費用の支払いを申し出でるつて・・なんぼほび、冷静なんよ？ 普通は怒るやろ？」

「いや、これが男とやつたら、やうなるんかもしれへんけどな。あいつも、男やし、たまには、やつてみたいと思てもしゃーないとのは怒るやろ？」

思つてゐるから。」

女性とやつてみたいと言われたら、はい、そうですか、と、俺は素直に認められる。俺では、相手にならないのだし、本来の行為としては、そちらが正しい。だから、それをやりたいと言われたら、止める理由はないからだ。

「つまり、浮氣には該当せえーへんと？」

「せえーへんやううな。だいたい、あいつ、俺に向かつて、ソープで抜いて来い、とか、いつも言つてゐるからなあ。」

「ふーん、そういうもんなんや。勉強になつたわ。」

「ほんま、自分、動じひんな。」

「それなりに場数は踏んでるから。ほほほほほ。」

ネコの人は、初めてやつたけどね、と、千佳ちゃんは大笑いして、やつてきたデザートプレートに手を出した。適当に、それを摘みつつ、「それでやな。」と、千佳ちゃんは、さらに笑つた。

「水都もすごいけど、あんたも、すごいと言えばすごいで？　わかつてないみたいやけど。」

「そうか？」

「だつて、普通、私の名前とか素性とか確かめるやんか？　それやのに、あんた、一言も尋ねてないんやで？」

「そうやつたかな？　千佳ちゃんが言わへんから、ええんかと思つてたんや。」

「ほら、そこや。あんたも水都も、そつこつこ似てるんぢやう？　他人に関心ないやん。」

そう言われても、ピンとくるものではない。元々、俺は、煩わしい人間関係は面倒なので、適当に距離のある付き合いでしたいほうだ。それには、あまり他人に深入りするようなことは尋ねない。千佳ちゃんが、どういう仕事をしているか、なんてことは、この際、関係ないし、本名がわかつたところで、意味がないと思つていた。

「そういうもんやろ？」

「普通は、そうではない。」

「なら、俺も変わり者といふことでええわ。」

「充分に変わり者やわ、ネコの田那。」

「おおきに、褒め言葉として受け取つとくわ。・・・あの、俺、そろそろ出てもええかな？　あんまり遅くなると、あほが慌てるんで。」

「 小一時間くらいは、大丈夫だと思うのだが、ボケている俺の嫁は、俺の言葉を理解したかどうか微妙だ。さっさと帰らないと、また、ふらふらと出て行きそうだ。一応、そこの支払いよりは、かなり大目の金額を、レシートの上に置いた。いらない、と、言われても、ガソリン代ぐらには出しておひつと思つた。」

「 律儀やな？」

「 びっくりさせたお詫びも兼ねてゐる。ほな、これで。」

「 ネコの人によろしく。それから、もし、また出張するんやつたらな、これ、携帯やから。ネコの世話くらいはしたげる。」

「 ネスターに、すらすらと書かれた一連の数字は、千佳ちゃんの携帯ナンバーだった。だが、それは、「ごめん。」と、返した。「これはもうわれへん。もう、出張とかないはずやし、何度も、こんな真似させるわけにはいかへんから。・・・ていうかな、ちゃんとした付き合いを考えや、千佳ちゃん。」ひこつのは、よくないで？」

「 じじむさい。」

「 それが普通や。ほな、ほんま、おおきに。」

「 これで、逢うこともない相手だ。よくもまあ、こんな女を引き当ててきたもんだ、と、水都のナンパに驚く。でも、こういう人だから、余計な煩わしさはなかつたともいえる。お礼を言つと、俺は振り返らず、さつとファミレスを出て、スーパーに向かつた。水都の様子では、そんなに量は食べないだろうが、せつかくだから、山菜のまぜごはんを作つてみるつもりだつた。」

「出かけてくるで。」と、ぼんやりした脳みそに響いていたが、ほとんど聞こえていなかつた。時間的に買い物だらうとは、起きてから気付いた。そろそろベッドは飽きたので、居間へ移動した。そこで、こたつの横に置かれている紙袋に目がいった。

・・・ん？・・・

どう見ても、俺のスーツとワイシャツで、なぜ、こんなものが紙袋に詰められているのか、少し考えた。

・・・え？・・・

一週間という時間を忘れたと思っていたが、思い出せば、それなりに蘇ることはある。家に帰るのが億劫で、千佳の家に転がり込んだ。そこまで思い出して、ここに、その時の衣装が戻つて来ている事実に、顔が青褪めた。

・・・バレてる・・・・というか、どうなつて、俺は、ここにあるんよ？・・・

千佳の家に居候していたのは、はつきりしている。満足できないながらも、やることはやつていた。それが、どうなつたら、ここにいられるのか、今ひとつ理解できなくて、そこへ座り込んだ。

・・・千佳は？・・・

よくよく考えたら、なぜ、花月が、俺を探せたのかも疑問だ。行きずりの千佳の家なんて、花月は知らない。スーツの一一番上には、俺の財布とか定期券とかが、ご丁寧に載つかつていて。だが、これは現実だ。千佳とやつたのでは、到底、痛まない場所が無いのだから、昨日の出来事は本物だ。

・・・とりあえず、千佳と連絡とらなあかんのちゃうか？・・・

しかし、なのだ。千佳の連絡先なんて、俺は知らない。家の場所はわかるから、それなら、直接、確認して来るほうがいいか、と、服を着替えようと部屋に戻つた。

入れ替わるように、花月が玄関から入ってきたので、もう一度、部屋の外へ顔を出した。

「おひ、起きたか？」

花月は、何も変わっていない。こつものように、スーパーの袋を手にして笑っている。

「・・あのな・・・」

「うん、なんや？」

「俺、女の家におつたはずやけど、なんぞ、じいに帰つてゐるやうやう？」

紙袋を指し示して、俺は花月に尋ねた。指差す方向をして、花月も、「あひ」と、声を出した。それから、残念そうに、「思い出したか。」と、言い出した。

「思い出すも何も・・・おまえ、なんで、俺を探せたんよ？」

「いや、あひ、うちのさんから返品依頼が来たから引き取つたんや。」

「千佳が？」

「やう、その千佳ちゃんが、『なんで求婚されなかんのじやあつ』と、うちの家に抗議に来やはつた。」

「あ？」

「それで、俺が引き取りに出向いて、千佳ちゃんに配達してもらつた。さつき、その服を、千佳ちゃんが、せりに届けてくれたわけや。以上。」

「そんなん知らん。」

「そら知らんやろう。おまえ、俺が出向いたら、『あんた、誰？』って言いやがつたらいいや。」

花月の言葉に、さすがに、自分の記憶を疑つた。まさか、そんなことを言つはずがない。だが、同居人の顔は真顔で、事実であると訴えている。

「なんで？」

「まあ、しゃーないやろ？ 俺がおらんから、俺自身を抹消したんやと思うで、おまえの脳みそ。・・・しかし、よう、あんな女、ひ

つかけたな？ おまえのナンパ技術に感心したぞ。」

怒っている様子ではない。呆れ果てたという顔で、スーパーの袋から荷物を取り出している。冷蔵庫に、とりあえず、荷物を整理して、パタンと扉を閉めた。

「水都、女とやりたいというのは、当たり前のことや。せやから、それについては、俺は怒るつもりはない。だいたい、おまえが俺に対して、『ソープへ行け。』と、言つてるんやから、そういうもんやろう。」

ただ、求婚はただけへんよ、と、低い声で言つて睨まれた。

「求婚したんか？ 俺。」

「うん、十日ぐらいで求婚したらしい。・・・遊ぶのは、かまへん。せやけど、それ以上はあかん。おまえは、俺の嫁に永久就職してることから、それは認められへんからな。それだけは覚えとけよ、水都。真剣に、俺の前に立つて花月に告げられた。謝るのが正しいと思うのだが、俺には、その記憶がない。」

・・・そのままほつといたらよかつたのに・・・

そう呟いたら、ペチンと軽く頬を叩かれた。

「何度も言つてるやろ？ それで、千佳ちゃんが、求婚受けて結婚してくれて、おまえは、ほんまに幸せなんか？ 違つやろ？ おまえ、千佳ちゃんに興味なんかないやんけ。ただ、千佳ちゃんが嫁という立場にいる人という認識であつて、好きとか傍におつて欲しいとかでもないやろ？ そんなん、千佳ちゃんにも失礼やし、生まれてくる子供にも迷惑や。・・・おまえは、俺の嫁で、俺が、ずっと傍にいて欲しいと願つてるから、この形でええねん。わかつたな？ それだけは忘れんでくれ。もし、忘れても確實に思い出させて連れて帰つてくる。なんべんでも試したらええわ。俺は、それでも諦めへんからつ。」

真剣に宣言されて抱き締められた。強すぎて、肺が圧迫されて苦しいほどだ。

・・・あほなやつ・・・わざわざ、厄介」とを引き取けるよつとも

んやのに・・・

壊れている俺は、何度もやるだらう。やつても、覚えていないし、たぶん、その場合、花月の顔すら、綺麗さっぱりと忘れてしまうのだらう。お互に、それで別れたら、すつきりするだらう」と、花月は、それはしないと言つ。変わった男やと思つていたが、これほどとは思わなかつた。

「おまえ、あほやろ？」

「おまえほどではないわ。」

水都の言葉と態度は違つ。抱き締めた身体は、細かく震えて、そして、俺の背中に手を回している。どうあると、おまえは、俺が必要やと思つてゐるんなら、それでええ。奥底の水都は、それを望んでいるのだと、俺は知つてゐるから、どうこう態度であつても、怒るつもりはない。

「千佳ちゃんに言われたけど、俺ら、似たもの夫夫らしいで？」

「どこがじゃつ。俺、おまえみたいに、しつこないわつ。」

「いや、そこやない。おまえも俺も、他人に無関心らしいわ。」

「・・・ああ・・それはそうかもしれへんな・・・

他人と認識しないのは、俺にとつて水都だけやし、水都にとつて俺だけということだ。だから、それでいい。

「メシ食うか？」

「・・うん・・・」

いつものように、ふたりして食事の支度をした。また、いつもの生活に戻る。それが、延々と續けば、問題はない。

永遠なんでものはない。

だが、続けることはできる。

続けていれば、それなりに永遠に近いものになるのだはないかと思う。

まだ、始まつたばかりだから、お互に、他人ではないといつ認識

そんあればいい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7151p/>

永遠

2010年12月30日12時09分発行